

—東地中海・北アフリカ地域ニュース—

エジプト：カイロで国家治安局将校の暗殺、「エルサレムのアンサール団」が犯行声明を発表

19日、カイロ郊外のナスル・シティーで、国家治安局（諜報機関）将校のムハンマド・マブルーク中佐が自宅前で射殺された。現地紙報道によると、同人は、8月以降のムスリム同胞団幹部に対する逮捕に関与してきた。また、ムルシー前大統領がハマースに情報を漏洩したとされる件や、同胞団が外国勢力から資金・武器提供を受けていたとされる件につき情報収集していた。

事件発生の同日、この事件に関し、シナイ半島を拠点に活動する「エルサレムのアンサール団」がインターネット上に犯行声明を発表した。声明文によると、犯行は「専制者の手から抑留者を解放する」作戦の一環として行われたもので、国家治安局や警察が女性達を取り調べのために抑留していることに対する報復とされる。これは、10月末から11月初旬にかけて、アレキサンドリアなどでムルシー支持派の女性達が抗議活動に参加し、当局に拘束された事件を指していると思われる。同組織は、女性達を解放しなければ、今後も国家治安当局や内務省およびその関係者を狙った殉教作戦を続けると警告している。

一方、ムスリム同胞団は今次事件を非難する声明をフェイスブック上に発表し、暗殺に同胞団が関与しているとの情報を否定した。

評価

今次犯行を認めた「エルサレムのアンサール団」は、9月のイブラーヒーム内相暗殺未遂事件においても犯行声明を発出した組織である。10月には、シナイ半島南部の治安関連組織や、イスマーイーリーヤの軍情報局舎に対する攻撃についても犯行声明を出した。そもそも、「エルサレムのアンサール団」はイスラエルに対する越境攻撃を主なジハード活動としてきたが、7月のクーデター以降は、標的をエジプト治安当局に変更したように見える。また、活動の場がシナイ半島から本土、そして首都カイロへと移動している点も見逃せない。

こうしたジハード主義組織は、軍を後ろ盾とした暫定政権が同胞団支持者の抗議を武力で制圧し、抗議参加者を拘束するという「ムスリム同胞に対する悪行」を「背教行為」として断罪する。したがって、エジプトの政権がムスリム同胞団を政治過程に取り込まない限り、ジハード主義組織によるエジプト当局への攻撃は続くと考えられる。

（金谷研究員）